

属性叙述のための there 構文に関する 構文理論的考察

南 佑 亮

1. はじめに

本論文は、これまでの研究ではほとんど注意を払われてこなかった (1)、(2) のようなタイプの構文現象に着目する。

(1) There is something special about her.

(2) There is something weird about the house.

(1) と (2) は、表面的な形式の上では (3) のように存在関係を表す there 構文 (以下、「存在 there 構文」) と類比的な関係にあるように見える。認知的構文文法理論 (Hilpert 2019) の観点からすると、(1)、(2) は (4) のような抽象的な構文的スキーマを (3) と共有しているようにも見える。

(3) There is a blue vase on the table.

(4) [there + be + Post-Verbal NP (=PVNP) + Prepositional Phrase (=PP)]¹⁾

しかし、両者の間には意味機能の面で明らかな違いがある。存在 there 構文の意味機能は、PVNP が PP の表す特定の場所に存在するという状況を描写することだが、(1) や (2) の there 構文の意味機能は、PVNP が

表す属性を PP の表す存在物に帰属させることである。この点を踏まえ、本稿では、後者のタイプの there 構文を前者の存在 there 構文と区別し、属性 there 構文と呼ぶ。以下、本論文では「存在 there 構文と形式は共有するが意味機能は異なる属性 there 構文は話者の知識の中でどのように位置づけられているか」という問いをめぐって、事実観察に基づく理論的な考察を試みる。

本論文の構成は以下の通りである。2 節と 3 節で、属性 there 構文には存在 there 構文とは異なる独自の形式的・意味的制約があることを見る。4 節では、意味と形式の関係に関する 2 つの理論の観点からこの現象を捉えることを試みる。5 節では結語と今後の研究の展望を述べる。

2. 属性 there 構文の形式的特徴

よく知られている通り、(5a) の存在 there 構文は、場所句（前置詞句）の前置（= (5b)）や、場所句倒置構文（= (5c)）への言い替えが可能である。²⁾

- (5) a. There is a blue vase on the table.
- b. On the table there is a blue vase.
- c. On the table is a blue vase.

これら 3 つの構文は、概念的な意味構造は共有しつつ、それぞれ異なる談話上の機能（情報構造）を担う変異体（variants）と見做すことができる。いわばこの 3 つの構文は、話者が談話上でその都度最適なものを選択する際の「手札」を構成するものである。したがって、もし (6a) のような属性 there 構文が存在 there 構文の一種であるならば同様の変異体を伴っているはずだが、実際は「場所句」の前置（= 6b）も倒置（= (6b)）も不可能である。

- (6) a. There is something weird about the house.
b. *About the house there is something weird.
c. *About the house is something weird.

場所句の前置や場所句倒置の成立条件が、(その名の示すとおり)前置される要素が「場所 (location)」を表すことであるならば、(6) の事実は、属性 there 構文の部分を構成する前置詞句 (about を主要部とする) はいかなる意味でも「場所」を表さないことを物語っている。

存在 there 構文にはさらに、(7a) や (7b) のような形式の変異体が存在する。

- (7) a. A blue vase is on the table.
b. The table has a blue vase on it.

(7a) は there を使用せず、PVNP が主語となる存在文である。不定の主語 (indefinite subject) であるため、限られた文脈をのぞいて基本的に避けられる傾向にある (Jespersen 1924: 154-6)。(7b) は、典型的には所有関係を表す動詞 have を使用し、場所が主語の位置に来ているが、場所を表す前置詞句も保持されており、表されている意味関係は存在 there 構文のそれに近い (池上 2007: 232-233)。

興味深いことに、この点でもやはり属性 there 構文は存在 there 構文と幾分異なる性質を示す。(8b) のように、have を用いた変異体 ((7b) に相当) は存在するが、PVNP を主語化した (8a) の変異体 ((7a) に相当) は不可能である。一方で、PVNP の主要部 something とそれを修飾する形容詞とが主述関係を結ぶ (9) の形式が変異体として存在する。

- (8) a. *Something weird is about the house.
b. The house has something weird about it.

(9) Something is weird about the house.

以上のように、形式上の変異体としての他構文との関係の在り方を考慮すると、属性 there 構文と存在 there 構文は表面上の印象よりも随分と性質が異なることが分かる。この事実は、属性 there 構文と存在 there 構文は、その表層的な形式的共通性にもかかわらず、それぞれの構文をとりまく変異体構文のネットワークのあり方が異なることを示唆しており、属性 there 構文が存在 there 構文と同種の構文であり互いに密接に結びついているという見方に疑問を投げかけている。

3. 意味的特徴

1 節でも述べた通り、属性 there 構文の意味機能は、前置詞 (about) 句の補部名詞句の指示対象に PVNP が表す属性を帰属させることである。これは、存在 there 構文において前置詞句補語の指示対象が PVNP の指示対象の存在する場所に対応することとは著しい対照を成す。以下では、属性を表す PVNP と属性の帰属対象を表す about 句それぞれの意味的特徴を順に見ていく。

3.1 PVNP の表す「属性」について

ここではまず、属性 there 構文の PVNP が指示する属性の性質について考える。「属性 (property)」を最もよく典型的に表すのは形容詞であって、属性叙述機能を最も典型的に担うのは、The car is blue. や She is incredibly beautiful. のように形容詞を述語とする文である (cf. Croft 2001: Chapter 2)。この点で属性 there 構文は典型的な属性叙述文からは逸脱している。何故なら、形容詞は用いられるが、それが直接的に属性の帰属対象 (about 前置詞句) を叙述していない。表現形式上、形容詞が直接的に関係を持つのは不定代名詞 something であり、about 句の指示対象に帰せられるべき属性を表すのはあくまで something と形容詞で作られる PVNP 全体 (=

[something ADJ]) である。属性叙述 there 構文は、形容詞句ではなく、名詞句を述語とする属性叙述文なのである。

この点を踏まえ、属性叙述 there 構文の PVNP についてさらに詳しく調べると、特筆すべき性質が2つあることが判明する。第一に、不定代名詞 something に後続する形容詞が、話者による主観的な判断を反映したものに限られる。COCA で実例を調査すると、属性 there 構文に好んで用いられる形容詞は、(10) に挙げるように話者の主観に基づく価値判断にかかわるものに集中していて、(11) に示すように、五感によって知覚される客観的・物理的属性を表す形容詞は用いることができない。

(10) different, special, strange, familiar, odd, weird, fishy, funny, magical, comforting, nice³⁾

- (11) a. *There is something blue about the car.
b. *There is something shiny about the table.
c. *There is something loud about the bird's song.
d. *There is something tasty about the sauce.
e. *There is something smelly about the soup.
f. *There is something smooth about the stone.

(11) の各例における形容詞は五感によって知覚される客観的・物理的属性を表すものであるため、直接の描写対象である something が何か実体をとともなう具象物を指示せねばならない。その具象物は about 句の指示対象とは独立して存在することになり、これは something ADJ という句が about 句の指示対象に帰属される属性を表すという属性 there 構文の意味構造と矛盾するのである。

(11) の事実は、「something は、実体を伴う具象物を指してはならない」というもう一つの制約の存在も示唆している。この構文における something の意味は「話者にとって、実体を伴わず正体のよくわからない

何か」でなくてはならない。このことは、先に指摘した形容詞が主観的な価値判断を表すものでなくてはならないという制約とも連動している。主観的な価値判断は話者の認識に基盤があるものであって、具象物の存在を必要としないため、(11)の各文で生じているような強制 (coercion) が生じることはなく、something が物理的な実体を伴わない抽象的なものを指すという解釈が保持されているのである。

3.2 前置詞句 (about 句) の意味的特徴

次に、属性の帰属対象を表す about 句の特徴を検討する。本稿がここまで挙げてきた属性 there 構文の例はすべて、about 句の補部が単純な名詞句からなるものに限られていた。つまり、ある個体 (individual) の属性を叙述しているケースだけを挙げてきた。しかし、実例を観察すると、属性 there 構文で描写されうる属性の帰属対象には個体そのものに限定されず、多様なパターンが見られる。そのうち主な3つの類型を COCA からの実例とともに以下に挙げる⁴⁾。

[i] 特定の状態にある個体 (分詞による後置修飾を伴う場合)

(12) “There’s something unbelievable about *the world spending hundreds of billions of dollars annually to subsidize its own destruction.*” (COCA 2012 News)

(13) There’s something special about serious music performed in settings of atmospheric architecture and splendid acoustics. (COCA 2018 News)

このタイプは、属性の帰属対象に個体が関わっているという点ではこれまでのものと同様である。しかし、属性帰属の対象が個体そのものではなく、「特定の状態にある個体」になっているという違いがある。(12)において属性帰属の対象となっているのは世界それ自体ではなく、毎年のよう

に自らを破壊するために巨額の助成金を出すという状態にある世界である。

[ii] 特定の個体が示す性質や振る舞い

(14) There's something impressive about *his utterly bland ruthlessness* when it comes to these races. (COCA 2014 Spoken)

(15) There's something suspicious about *King Chicken's sudden and unlikely generosity*, ... (COCA 1997 TV)

このタイプは、[i]と同様に個体は関与するが、属性の帰属対象となっているのは個体それ自体ではなく、その個体が示す性質・気質の方である。⁵⁾

[iii] 特定の行為や状態そのもの（個体は不特定）

(16) There is something comforting about *being anonymous in this strange city, lost in the crowd*. (COCA 2010 Fiction)

(17) There's something disturbing about *recalling a warm memory and feeling utterly cold*. (COCA 2012 Fiction)

(18) As a storyteller, there was something inhuman about *forcing people into silence*. (COCA 2013 Movie)

このタイプは、[i] や [ii] とは異なり、個体は属性叙述対象に含まれていない。属性叙述の対象となっているのは、特定の個体からは切り離され、一般化された行為や状態であり、行為主体を明示しない動名詞で表現されている。このタイプが個体のみを叙述対象とする事例から最も逸脱したものであると言える。言うまでもなく、前置詞句補語が動名詞句になるというのは存在 there 構文では不可能である。

属性の帰属対象が個体ではなく状態や行為でもありうるという性質は、この構文が属性叙述機能を担いかつ PVNP が話者による主観的判断を表すという事実を勘案すれば、決して驚くべきことではない。なぜなら、(19)

に示すように、ある状態・行為に対する主観的判断を表す節レベルの構文として、モーダル形容詞を述語とし、to 不定詞を帰属対象とした構文が存在するからである。

- (19) a. It is special to spend a day at the ocean.
b. It is magical to watch a movie outside and under a ceiling of stars.

ただし、(19) の構文と属性 there 構文は同義ではない。同じ内容を (20) のように属性 there 構文で表現すると「なぜ special/magical なのかはよくわからない」という推意 (implicature) が生じるが、これは (19) の構文には当てはまらない。^{6), 7)}

- (20) a. There's something special about spending a day at the ocean.
b. There's something magical about watching a movie outside and under a ceiling of stars.

属性 there 構文と (19) の構文のあいだのこの相違点は、不定代名詞 something の存在に帰せられる可能性がある。詳細な分析は別稿に譲るが、よく知られているように数量詞 some にはあえて情報を明確にしないでおく用法がある。⁸⁾ この性質が上記のような推意 (implicature) を導くプロセスに貢献している可能性が高いと思われる。

3.3 まとめ

3.1 節、3.2 節での観察をまとめると、以下のようなになる。

- (21) a. 属性 there 構文は、about 句が表す対象に主観的判断に基づく属性を帰属させるというものであり、その帰属対象は特定の個

属性叙述のための there 構文に関する構文理論的考察

体だけではなく状態や行為の場合もある。

- b. 述語に形容詞が含まれるが、対象に帰属されるべき属性の叙述という機能を担うのは形容詞単独ではなく、something を主要部とした PVNP 全体である。
- c. 属性 there 構文が表す主観的判断には、「なぜそうなのかはよくわからない」という推意が伴う。

次節では、属性 there 構文について、形式と意味の関係を探る 2 つの理論（叙述類型論と認知的構文文法理論）の観点から検討する。

4. 理論による検討

4.1 叙述類型論

叙述類型論（益岡 1987, 2004, 2008）は、叙述（predication）が事象叙述と属性叙述の 2 つのタイプに大別されることを提唱する。この理論では、特定の時空間に実現するイベント（出来事）を描写する事象叙述文とは異なり、属性叙述文は対象を表示する部分と属性を表示する部分の 2 つの部分から構成されており、属性の帰属対象は主題とした主題構造（主題（topic）—解説（comment）構造）を有するとされる。この構造上の区別は、日本語の場合、事象叙述文（=(22)）は主語に「ガ」が伴う場合が無標であるのに対して、属性叙述文（=(23)）は主語名詞句に主題標識「ハ」が伴う場合が無標である、という事実反映されているという。

(22) 子供がにっこり笑う。

(23) 日本は島国だ。

影山（2009、2012）は、叙述類型論におけるこのような 2 つのタイプの叙述文が意味構造上だけでなく（統語）構造上・文法上の制約という点でも大きく異なる性質を示すことを、様々な例を挙げて論証している。こ

ここでは影山が挙げる様々な言語の様々な現象のうち、英語に見られる現象を2つ取り上げる。

1つ目は、形容詞的過去分詞・受身分詞である。一般的原則として、この形式は他動詞(24a)もしくは非対格自動詞(24b)にのみ適用され、それぞれの内項(他動詞の場合は目的語、非対格自動詞の場合は主語)の変化状態を述べるための表現であり、(24c)にあるように、非能格自動詞には適用されない。

- (24) a. 他動詞からの派生(形容詞的受身): baked potatoes, boiled eggs
b. 非対格自動詞からの派生: an expired passport, withered flowers
c. 非能格自動詞からの派生は不可: *the laughed boy (the boy who laughed の意味で), *a run athlete (an athlete who ran の意味で)

(影山 2009: 8)

しかし、この一般原則に反する(25)のような例が存在する。いずれも非能格動詞を基盤としており、そのため(内項ではなく)外項の特性が描写されている。

- (25) a. much/well/far-traveled man (見識の広い人) Cf. a much-traveled road
b. a well-read scholar (博識の学者) Cf. a well-read book
c. a soft-spoken person (穏やかな話し方をする人) Cf. spoken language

(影山 2009: 8)

(25) の形容詞分詞は、基体となる非能格動詞が結果状態を伴う状態変

化を表すものではない。したがって (24a) (24b) とは異なり、結果状態ではなく、「基体動詞が表す動作・行為を踏まえて、それが修飾する名詞の属性を描き出している」(影山 2009: 8)。つまりその意味機能は (24a) や (24b) のそれとは質的に大きく異なっている。

2つ目の現象は、Davison (1980) が異常受身文 (peculiar passives) と呼ぶものである。通常、英語の受身化規則は他動詞直後の目的語 (=26a)、および語彙的に指定された動詞+前置詞の連鎖における前置詞の目的語 (=26b) にのみ適用され、この条件に違反する (26c) のような例は明確に非文法的として排除される。

- (26) a. Your hamburger was eaten by the dog. (eat の直接目的語)
b. The boy was looked after by his grandmother. (前置詞付き動詞の目的語)
c. The boy ate your ice cream with this spoon. (付加詞) → *This spoon was eaten your ice cream with by the boy.

(影山 2009: 10)

ところが、この一般原則に反すると思われる (27) のような事例がある。

- (27) a. This spoon has been eaten with. (Davison 1980)
b. That city has been fought many a battle over. (Bolinger 1975)

影山は、(27) には出来事が起こった特定の一時点を指したり時間に沿った展開を表したりすることができないという特徴があることを指摘したうえで、以下のように説明する。

- (28) 英語異常受身文は特定の時間に起こった出来事の展開を表す事

象叙述ではなく、現在完了形あるいは often などの頻度副詞を伴った過去形の使用によって「過去の経験」を踏まえた現在の属性を表す文であると理解できる（中略）。また、未発生 of 出来事の場合でも、（中略）should, must 等の義務の法助動詞を用いることによって、「主語がこれこれの物である」という恒常的な属性を述べる。（影山 2009: 10）

このように、英語の受身文については、通常 of 受身文が事象叙述機能を、異常受身文が属性叙述機能を担っているということになる。

形態レベル、統語レベルという違いを超えて以上の2つの現象に共通するのは、事象叙述では規則から逸脱していて異常と見做されるものが属性叙述では文法的になる、という構図である。影山（2009）は「従来の構造制約による規定が関与する事象叙述と、その構造制約が通用しない属性叙述は、いわば別個の世界を形成し、それぞれが独自の構造様式と意味機能を有している」（p. 8）とさえ述べている。

ではこの観点から属性叙述 there 構文を見るとどうなるだろうか。2節で見た通り、存在 there 構文とは異なり、場所句倒置や場所句前置が不可能であるという点で異なる統語的制約が課せられている。さらに3.2節で見た通り、前置詞句の補部については、属性 there 構文の方がより制約が少なく、生起可能な形式上の選択の幅が広い。畢竟、存在 there 構文と属性 there 構文は、表面上の形式は共有しているものの、その形式上の制約には無視できない違いがある。この差異を「存在 there 構文で見られるはずの形式上の特徴が属性 there 構文には当てはまらなくなっている」と解釈することは十分可能であり、事象叙述と属性叙述の構造制約の違いに関する影山（2009, 2012）の説と符合する。このように、2節と3節で見た存在 there 構文と属性 there 構文の構造上の性質の違いは、事象叙述文か属性叙述文か、というより一般性の高い意味概念上のカテゴリーに起因していると分析できる。

4.2 認知的構文文法理論

Goldberg (1995, 2006) に代表される認知的構文文法理論 (Cognitive Construction Grammar) は、その理論的基盤において認知文法理論 (Langacker 1987) の影響を強く受けている。認知文法の際立った特徴の一つが、言語の形式を分析する際に、(初期の) 生成文法理論で提案されたような異なる形式を持つ統語形式を変形 (transformation) や派生 (derivation) で関連付けるという方法を一切仮定しないことである。この方針は認知的構文文法理論でも堅持され、Goldberg (2002, 2006) では、異なる形式を持つが意味上の結びつきがあるとされる構文のペアのあいだの関係よりも、表面上の形式の共通性を基にした一般化 (surface generalization) の重要性を強調した「表層構造による一般化の仮説」(Surface Generalization Hypothesis) を提示している。この仮説では、話者が構文交替 (alternations) と呼ばれる現象を言語知識内でひとまとめにして認識している可能性にも疑いの目が向けられる。

その後、このようなスタンスに疑問を投げかける研究が出てきている。Cappelle (2006) や Perek (2015) による研究は、交替関係にある構文同士は、話者の知識の中では関連付けられていることを示しており、話者は必ずしも形式の同一性を前提としないレベルでの意味的な一般化も抽出し利用していることが判明しつつある。つまり、話者の言語知識を成す構文の集合体 (“constructicon” と呼ばれる) には、同じ統語形式が共有されていなくても、意味的な共通性に基づいた一般化も含まれることが明らかになってきている。Perek (2015) は、構文研究にも構文素 (constructeme) と異構文 (allostructions) という発想を取り入れる必要を説く Cappelle (2006) の考えを支持し、以下のように述べている。

- (29) Just like some construction grammarian acknowledge the existence of purely formal generalizations (…), i.e., generalizations of common formal features independently of shared

meaning, like the subject-auxiliary inversion construction (…), I argue, in line with Cappelle, that a thorough description of the “constructicon” should also include *semantic generalizations that are (at least partly) independent of syntactic form*. Including alternations explicitly in the grammar serves to capture the speaker’s awareness that some constructions are semantically similar and can be used as alternative ways to encode a particular category of meanings (…) (Perek 2015: 154; イタリックは筆者による)

とりわけ後半部分の、「話者は意味的に似通ったいくつかの形式的に異なる構文が存在し、それらの構文がある特定の種類の意味を言語化する際の選択肢 (alternative ways) として利用されうるものであるということを経験している」という点は注目に値する。これは別の角度から見れば、「たとえ表面上の形式が同一である構文であっても、意味が異質な場合は、ある特定の種類の意味を言語化する際の選択肢として利用されうるものとは話者に認識されていない」ということでもある。

この考え方を支持する例として、Perek (2015) による与格交替 (dative alternation) の分析を取り上げる。その概略は以下のようなものである。まず、Goldberg (2002) の考え方にしたがえば、to 与格構文の to 前置詞句は経路と場所 (目的地) を表していることとなり、二重目的語構文よりもむしろ移動使役構文との結びつきが重要ということになる。

- (30) a. I gave him a ball.
 b. I gave a ball to him.

しかし、典型的な与格構文の to 前置詞句は、一般的に経路句にあるはずの性質を持たない。まず、場所を問うための wh 句である *where* で問うこ

とができず、代わりに *to whom* とせねばならない。

- (31) a. *Where did you give the ball?
b. To whom did you give the ball?

(Rappaport and Levin 2008: 143)

また、他の前置詞句と結びついて複雑な経路を表すことができない。

- (32) a. *Jill gave/offered the ball off the shelf to Bob.
b. *Jill gave/offered the ball off herself to Bob.
c. *Jill gave/offered the ball through the window to Bob.⁹⁾

(Perek 2015: 156)

一方、Rappaport and Levin (2008) も詳細に論じているように、二重目的語構文と *to* 与格構文とのあいだの意味的な相違は、動詞の種類によってはほとんど顕現しない場合もある。これらの事実を踏まえ、Perek (2015: 155-6) は、*to* 与格構文と二重目的語構文は同一の事象レベルの意味を異なる構造で具現している異構文 (allostructions) とする分析を提案している。

では、話者の言語知識内での属性叙述 *there* 構文の位置づけについてはどうなるだろうか。まず、(33) のような属性叙述 *there* 構文が関係を持ちうる構文の候補として、(34) の3つがあるとしよう。

(33) There is something strange about the table.

- (34) a. There is something strange on the table.
b. The table has something strange about it.
c. Something is strange about the table.

もし Surface Generalization Hypothesis にしたがうならば、表層の形式を共有する (34a) こそが (33) と最も密接に関連付けられることが予測される。しかし、3 節で詳細に見た通り、(33) と (34a) とでは形式的な特徴が大きく異なる。とりわけ、前置詞句の性質の違いは、先に見た to 与格構文の to 前置詞句と経路句の性質が違っていることと類比的である。しかし (33) と (34a) には、to 与格構文と移動使役構文よりもさらに大きな違いがある。to 与格構文と移動使役構文は、どちらも事象を表す事象叙述文である点では共通しているのに対し、(33) は属性叙述文、(34a) は事象叙述文であり、そもそも意味概念のタイプが異なる。つまり、something strange が (34a) では具象物を指すが、(33) は実体を伴わない抽象的な属性を指す (cf. 3.1 節)。これとは対照的に、(34b) と (34c) はいずれも (33) と同様に属性叙述文であり、PVNP (something strange) の解釈も (33) と同様に、実体をともなわない抽象的な属性であって、異なるのは文の構造とそれに伴う情報構造のみである。Cappelle (2006) や Perek (2015) の考え方を取るならば、(33) と (34b) , (34c) が異構文 (allostructions) を成すと仮定して分析を進める方が妥当ということになる。

4.3 まとめ

4.1 節では、属性 there 構文の形式的・意味的な特徴が存在 there 構文とは食い違うという事実が、叙述類型論における構造制約に関する影山の説を支持する一事例であることを論じた。4.2 節では、Perek (2015) らの議論を応用し、属性 there 構文が存在 there 構文よりもむしろ変異体構文の方に強く結びけられている可能性を指摘した。

5. 結語

本稿は、属性 there 構文に着目し、この構文が存在 there 構文とは異質な統語的・意味的性質を示すことを明らかにした。さらに、叙述類型論および認知的構文文法理論の観点から、属性 there 構文は属性叙述機能を担

う属性叙述文であるため、事象叙述機能を担う存在 there 構文とは異質なものであること、そしてそれゆえに存在 there 構文よりも、形式は異なるが意味機能を共有する変異体構文と密接に関連付けられているという予測が導かれることを論じた。今後は、この予測の妥当性を検証する方法を探る必要がある。

最後に、叙述類型論と認知的構文文法論の関係について付言しておく。2つの理論はどちらも意味と形式の関係に重点を置く点が共通しており、本論文での議論からも、両者は互いに高い親和性を示すであろうことが見込まれる。事象叙述と属性叙述という意味機能の区別が、構文ネットワークの知識の中でも大きな役割を果たしていることも予想できる。今後の研究において2つの理論を統合する方法を探る意義は決して小さくないように思われる。

謝辞

本研究は、科学研究費（基盤（C）研究課題番号19K00697）を受けておこなわれたものである。母語話者コンサルタントとしてご協力いただいた James Crocker, Marsha Hayashi, Jon-Patrick Fajardo の各氏に御礼を申し述べたい。尚、本稿の不備はすべて筆者によるものである。

注

- 1) PVNP という略称は Birner and Ward (1998) に倣ったものである。
- 2) Kuno (1971: 350) は (5c) のタイプの場所句倒置文から場所句後置 (locative-postposing) という変形操作で (5a) のような there 構文が派生し、そこからさらに副詞句前置 (Adverb-preposing) 規則によって (5b) のような場所句前置構文が派生している、と分析している。理論的な想定は古いものだが、このような分析の動機にあるのは、話者の知識内で3つの構文が互いに密接な関係にあるという直感であることは確かである。
- 3) COCA を用いた筆者独自の調査 (2020年10月実施) に基づき、事例数の上位を占める形容詞を列挙したものである。
- 4) 以下に挙げる COCA からの実例におけるイタリック体はすべて筆者によるもの

である。

5) ここに挙がっているものはすべて「属性に関する属性叙述」であり、明らかにそこには複雑な認知プロセスが関与しているという点で興味深い現象であるが、これに関する分析は別稿に譲りたい。

6) この点は James Crocker 氏からのご教示による。

7) 属性 there 構文に生起しうる形容詞がすべて (20) のタイプの構文の述語となれるわけではなく、前者にしか見られない形容詞もある。

8) たとえば Mey (2001: 70) は次のように述べている。

“The use of a vague expression such as “some” or “many” tells our interlocutors that (all other things being equal) we want to be vague (…)”

9) (32) の例文は Perek (2015: 155) によれば Rappaport and Levin (2008) から抜粋したということであるが、筆者が確認した限り (32) は同論文には見当たらず、Perek による独自の例文と思われる。

参考文献

- Birner, Betty J. and Gregory Ward. (1998) *Information Status and Non-canonical Word Order in English*. Amsterdam: John Benjamins.
- Bolinger, Dwight. (1975) “On the Passive in English.” In Adam Makkai and Valerie Becker Makkai (eds.) *The First LACUS Forum*, 57-77. Columbia, S.C.: Hornbeam.
- Breivik, Leiv Egil. (1981) “On the Interpretation of Existential *There*.” *Language* 57, 1-25.
- Cappelle, Bert. (2006) “Particle Placement and the Case for “Allostructions”.” *Constructions, Special Volume 1*, 1-28.
- Croft, William. (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Davies, Mark. (2008-) *The Corpus of Contemporary American English (COCA): 560 million words, 1990-present*. Available online at <https://corpus.byu.edu/coca/>.
- Davison, Alice. (1980) “Peculiar Passives.” *Language* 56, 42-66.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: Chicago University Press.
- Goldberg, Adele E. (2002) “Surface Generalizations: An Alternative to Alterna-

- tions." *Cognitive Linguistics* 13 (4), 327-356.
- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work*. Oxford: Oxford University Press.
- Hilpert, Martin. (2019) *Construction Grammar and its Application to English, 2nd Edition*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- 池上嘉彦 (2007) 『日本語と日本語論』東京：筑摩書房.
- Jespersen, Otto (1924) *The Philosophy of Grammar*. London: Allen & Unwin.
- 影山太郎 (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』第136号, 1-34.
- 影山太郎 (2012) 「属性叙述の文法的意義」影山太郎編『属性叙述の世界』, 3-35, 東京：くろしお出版.
- Kimball, John. (1973) "The Grammar of Existence." C. Corum, C. T. Smith-Stark and A. Weiser (eds.) *Papers from the Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society (=CLS) 9*, 262-270.
- Kuno, Susumu. (1971) "The Position of Locatives in Existential Sentences," *Linguistic Inquiry* 2, 233-278.
- Lakoff, George. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: Chicago University Press.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar. Volume 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson. (1976) "Subject and Topic." In Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*, 457-489. New York: Academic Press.
- Lyons, John. (1967) "A Note on Possessive, Existential and Locative Sentences." *Foundations of Language* 3 (4), 390-396.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』東京：くろしお出版.
- 益岡隆志 (2004) 「日本語の主題—叙述の類型の観点から—」益岡隆志編『主題の対照』, 3-17, 東京：くろしお出版.
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」益岡隆志編『叙述類型論』, 3-18, 東京：くろしお出版.
- Mey, Jacob. (2001) *Pragmatics: An Introduction, 2nd Edition*. Oxford: Blackwell.
- Milsark, Gary. (1974) *Existential Sentences in English*. Ph.D. dissertation. MIT, Cambridge, MA. Reprinted: New York: Garland, 1979
- Perek, Florent. (2015) *Argument Structure in Usage-Based Construction Gram-*

南 佑 亮

mar. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin. (2008) “The English Dative Alternation: The Case for Verb Sensitivity.” *Journal of Linguistics* 44, 129-167.

Taylor, John R. (2012) *The Mental Corpus*. Oxford: Oxford University Press.